

一兵卒

田山花袋

青空文庫

渠は歩き出した。

銃が重い、背囊はいのうが重い、脚あしが重い、アルミニウム製の金かな腕わんが腰の剣に当たってカタカタと鳴る。その音が興奮した神経をおびただしく刺戟しげきするので、幾度かそれを直してみたが、どうしても鳴る、カタカタと鳴る。もう厭いやになってしまった。

病気はほんとうに治つたのでないから、息が非常に切れる。全身には悪熱悪寒が絶えず往来する。頭脳が火のように熱して、顛顛こめかみがはげしい脈を打つ。なぜ、病院を出た？

軍医があとがたいせつだと言つてあれほど留めたのに、なぜ病院を出た？ こう思ったが、渠はそれを悔いはしなかつた。敵の捨てて遁にげた汚きたない洋館の板敷き、八畳へやくらいの室むろに、病兵、負傷兵が十五人、衰すいたい頹たいと不潔と叫喚と重苦しい空気と、それにすさまじい蠅はえの群集、よく二十日も辛抱していた。麦飯の粥かゆに少しばかりの食塩、よくあれでも飢餓を凌しのいだ。かれは病院の背後の便所を思い出してゾツとした。急造の穴の掘りようが浅いので、臭気が鼻と眼とをはげしく撲うつ。蠅がワンと飛ぶ。石灰の灰色に汚よごれたのが胸をむかむかさせる。

あれよりは……あそこにいるよりは、この闊ひろびろ々とした野の方がいい。どれほど好いか

しれぬ。満洲の野は荒漠こうばくとして何も無い。畑にはもう熟しかけた高梁こうりやんが連なっているばかりだ。けれど新鮮な空気がある、日の光がある、雲がある、山がある、——すさまじい声が急に耳に入ったので、立ち留まってかれはそつちを見た。さっきの汽車がまだあそこにいる。釜かまのない煙筒のない長い汽車を、支那苦力クリーリが幾百人となく寄つてたかつて、ちようど蟻ありが大きな獲物を運んでいくように、えっさらおっさら押していく。

夕日が画のように斜めにさし渡つた。

さっきの下士があそこに乗っている。あの一段高い米の吠かますの積み荷の上に突つ立っているのが彼奴きやつだ。苦しくつてとても歩けんから、鞍山あんざん站まで乗せていってくれと頼んだ。

すると彼奴め、兵を乗せる車ではない、歩兵が車に乗るといふ法があるかどなった。病氣だ、ご覽の通りの病氣で、脚氣かっけをわずらつてゐる。鞍山站の先まで行けば隊がいるに相違ない。武士は相見互いということがある、どうか乗せてくれつて、たつて頼んでも、言うことを聞いてくれなかつた。兵、兵といつて、筋が少ないとばかにしやがる。金州でも、得利寺でも兵のおかげで戦争に勝つたのだ。馬鹿奴ばかめ、悪魔奴！

蟻だ、蟻だ、ほんとうに蟻だ。まだあそこにいやがる。汽車もあなつてはおしまいだ。ふと汽車——豊橋を発たつてきた時の汽車が眼の前を通り過ぎる。停車場は国旗で埋められ

ている。万歳の声が長く長く続く。と忽然最愛の妻の顔が眼に浮かぶ。それは門出の時の泣き顔ではなく、どうした場合であつたか忘れたが心からかわいいと思つた時の美しい笑い顔だ。母親がお前もうお起きよ、学校が遅くなるよと揺り起こす。かれの頭はいつか子供の時代に飛び返つてゐる。裏の入江の船の船頭が禿頭を夕日にてかてかと光らせながら子供の一群に向かつてどなつてゐる。その子供の群れの中にかれもいた。

過去の面影と現在の苦痛不安とが、はつきりと区画を立てておりながら、しかもそれがすれすれにすりよつた。銃が重い、背囊が重い、脚が重い。腰から下は他人のようで、自分で歩いてゐるのかいないのか、それすらはつきりとはわからぬ。

褐色の道路——砲車の轍や靴の跡や草鞋の跡が深く印したままに石のように乾いて固くなつた路が前に長く通じてゐる。こういう満州の道路にはかれはほとんど愛想をつかしてしまつた。どこまで行つたらこの路はなくなるのか。どこまで行つたらこんな路は歩かなくつてもよくなるのか。故郷のいさご路、雨上がりの湿つた海岸の砂路、あの滑らかな心地の好い路が懐しい。広い大きい道ではあるが、一つとして滑らかな平らかなところが無い。これが雨が一日降ると、壁土のように柔らかくなつて、靴どころか、長い脛もその半ばを没してしまふのだ。大石橋の戦争の前の晩、暗い闇の泥濘を三里もこねまわ

した。背の上から頭の髪まではねが上った。あの時は砲車の援護が任務だった。砲車が泥濘の中に陥って少しも動かぬのを押して押し通した。第三聯隊れんたいの砲車が先に出て陣地を占領してしまわなければ明日の戦いはできなかつたのだ。そして終夜働いて、翌日はあの戦争。敵の砲弾、味方の砲弾がぐんぐんと厭な音を立てて頭の上を鳴って通った。九十度近い暑い日が脳天からじりじりと照りつけた。四時過ぎに、敵味方の歩兵はともに接近した。小銃の音が豆を煎いるように聞こえる。時々シュツシュツと耳のそばを掠かすめていく。列の中であつと言つたものがある。はツと思つて見ると、血がだらだらと暑い夕日に彩いろどられて、その兵士はガツクリ前にのめつた。胸に弾丸があたつたのだ。その兵士は善い男だった。快活で、洒脱しゃだつで、何ごとにも気が置けなかつた。新城町しんしろまちのもので、若い鼻かかあがあつたはずだ。上陸当座はいつしよによく徴発に行つたつ。豚を逐おい廻まわしたつ。けれどもあの男はもはやこの世の中にいないのだ。いないとはどうしても思えん。思えんがいないのだ。

褐色の道路を、ひょうろう糧 餉りょうを満載した車がぞろぞろ行く。騾車ろしゃ、驢車ろしゃ、支那人の爺おやじのウオウオウイウイが聞こえる。長い鞭むちが夕日に光って、一種の音を空氣に伝える。路の凸凹でこぼこがはげしいので、車は波を打つようにしてガタガタ動いていく。苦しい、息が苦しい。こ

う苦しくつてはしかたがない。頼んで乗せてもらおうと思つてかれは駆け出した。

金椀がカタカタ鳴る。はげしく鳴る。背囊の中の雑品や弾丸袋の弾丸がけたたましく躍り上がる。銃の台が時々脛を打つて飛び上がるほど痛い。

「オーい、オーい」

声が立たない。

「オーい、オーい」

全身の力を絞つて呼んだ。聞こえたに相違ないが振り向いてもみない。どうせ碌なことではないと知つているのだろう。一時思い止まったが、また駆け出した。そして今度は最後の「輻いちりよう」にようやく追いついた。

米の吠が山のように積んである。支那人の爺が振り向いた。丸顔の厭な顔だ。有無をいわずその車に飛び乗った。そして吠と吠との間に身を横たえた。支那人はしかたがないというふうでウオーウオーと馬を進めた。ガタガタと車は行く。

頭脳がぐらぐらして天地が廻かいてん転するようだ。胸が苦しい。頭が痛い。脚の腓ふくらはぎのところを押しつけられるようで、不愉快で不愉快でしかたがない。ややともすると胸がむかつきそうになる。不安の念がすさまじい力で全身を襲った。と同時に、恐ろしい動揺がまた始

まっつて、耳からも頭からも、種々の声こゝろが囁ささやいてくる。この前にもこうした不安はあつたが、これほどではなかつた。天にも地にも身の置きどころがないような気がする。

野から村に入つたらしい。鬱こもり蒼とした楊やなぎの緑がかれの上に靡なびいた。楊樹やなぎにさし入つた夕日の光が細かな葉を一葉一葉明らかに見せている。不ぶ恰か好こうな低い屋根が地震でもあるかのように動揺しながら過ぎていく。ふと気がつくつと、車は止まつていた。かれは首を挙あげてみた。

楊樹の蔭かげを成しているところだ。車輛くるまが五台ほど続いているのを見た。

突然肩を捉えるものがある。

日本人だ、わが同胞だ、下士だ。

「貴様はなんだ？」

かれは苦しい身を起こした。

「どうしてこの車に乗つた？」

理由を説明するのがつらかつた。いや口をきくのも厭なのだ。

「この車に乗つちやいかん。そうでなくつてさえ、荷が重すぎるんだ。お前は十八聯隊だナ。豊橋だナ」

うなずいてみせる。

「どうかしたのか」

「病気で、昨日まで大石橋の病院にいたものですから」

「病気がもう治なおったのか」

無意味にうなずいた。

「病気でつらいだろうが、おりてくれ。急いで行かんけりやならんのだから。遼陽りょうよう

が始まったでナ」

「遼陽！」

この一語はかれの神経を十分に刺戟した。

「もう始まったですか」

「聞こえんかあの砲が……」

さつきから、天末に一種のとどろきが始まったそうなどは思ったが、まだ遼陽ではないと思っていた。

「鞍山あんざん站は落ちたですか」

「おとといおととい昨日落ちた。敵は遼陽の手前で、一防禦ひとふせぎやるらしい。今日の六時から始まったと

いう噂だ！」

一種の遠いかすかなるとどろき、仔細しさいに聞けばなるほど砲声だ。例の厭な音が頭上を飛ぶのだ。歩兵隊がその間を縫って進撃するのだ。血汐ちしおが流れるのだ。こう思った渠は一種の恐怖と憧憬どうけいとを覚えた。戦友は戦っている。日本帝国のために血汐を流している。

修羅しゆらの巷ちまたが想像される。炸弾さくたんの壯觀も眼前に浮かぶ。けれど七、八里を隔てたこの満洲の野は、さびしい秋風が夕日を吹いているばかり、大軍の潮のごとく過ぎ去った村の平和はいつもに異ならぬ。

「今度の戦争は大きいだろう」

「そうさ」

「一日では勝敗がつくまい」

「むろんだ」

今の下士は夥伴なかまの兵士と砲声を耳にしつつしきりに語り合っている。糧餉を満載した車五輛、支那苦力の爺連おやじれんも圈わをなして何ごとをかしやべり立てている。驢馬の長い耳に日がさして、おりおりけたたましい啼なき声が耳を劈つんざく。楊樹の彼方かなたに白い壁の支那民家が五、六軒続いて、庭の中に槐えんじゆきの樹が高く見える。井戸がある。納屋なやがある。足の小さい年

老いた女がおぼつかなく歩いていく。楊樹を透かして向こうに、広い荒漠たる野が見える。褐色した丘陵の連続が指さされる。その向こうには紫色がかつた高い山が蜿蜒えんえんとしていく。砲声はそこから来る。

五輦の車は行ってしまった。

渠かれはまた一人取り残された。海城から東煙台、甘泉堡かんせんほう、この次の兵站部へいたんぶ所在地は新台子といつて、まだ一里くらいある。そこまで行かなければ宿るべき家もない。

行くことにして歩き出した。

疲れ切っているから難儀だが、車よりはかえつていい。胸は依然として苦しいが、どうもいたしかたがない。

また同じ褐色の路、同じ高粱コーリヤンの畑、同じ夕日の光、レールには例の汽車がまた通った。今度は下り坂で、速力が非常に早い。釜かまのついた汽車よりも早いくらいに目まぐるしく谷を越えて駛はしつた。最後の車輛ひるがえに翻ひるがえつた国旗が高粱畑の絶え間絶え間に見えたり隠れたりして、ついにそれが見えなくなつても、その車輛のとどろきは聞こえる。そのとどろきと交じつて、砲声が間断なしに響く。

街道には久しく村落がないが、西方には楊樹のやや暗い繁茂しげりがいたるところにかたまつて、その間からちらちら白色褐色の民家が見える。人の影はあたりを見まわしてもないが、青い細い炊煙は糸のように淋さびしく立ち颯あがる。

夕日は物の影をすべて長く曳ひくようになった。高粱の高い影は二間幅の広い路を蔽おほつて、さらに向こう側の高粱の上に蔽い重なった。路傍の小さな草の影もおびただしく長く、東方の丘陵は浮き出すようにはつきりと見える。さびしい悲しい夕暮れは譬たとえ難い一種の影の力をもつて迫つてきた。

高粱の絶えたところに来た。忽然こつぜん、かれはその前に驚くべき長大なる自己の影を見た。肩の銃の影は遠い野の草の上にあつた。かれは急に深い悲哀に打たれた。

草叢くさむらには虫の音がする。故郷の野で聞く虫の声とは似もつかぬ。この似つかぬことと広い野原とがなんとなくその胸を痛めた。一時とだえた追懐の情が流るるように漲みなぎつてきた。

母の顔、若い妻の顔、弟の顔、女の顔が走馬燈のごとく巡回する。櫻けやきの樹で囲まれた村の旧家、団欒だんらんせる平和な家庭、続いてその身が東京に修業に行ったおりの若々しさが憶おもい出される。神楽坂かぐらざかの夜の賑にぎわいが眼に見える。美しい草花、雑誌店、新刊の書、角を曲

がると賑やかな寄席よせ、待合まち、三味線しゃみせんの音、仇めいた女の声、あのころは楽しかった。恋した女が仲町なかつちにいて、よく遊びに行つた。丸顔のかわいい娘で、今でも恋しい。この身は田舎いなかの豪家の若旦那わかだんなで、金には不自由を感じなかつたから、ずいぶんおもしろいことをした。それにあのころの友人は皆世に出ている。この間も蓋平がいへいで第六師団の大尉になつていばつてゐる奴に邂逅であつかわした。

軍隊生活の束縛ほど残酷なものはないと突然思つた。と、今日は不思議にも平生の様に反抗とか犠牲とかいう念は起こらずに、恐怖の念が盛んに燃えた。出発の時、この身は国に捧げ君に捧げて遺憾いかんがないと誓つた。再びは帰つてくる気はないと、村の学校で雄々しい演説をした。当時は元氣旺盛、身体壯健であつた。で、そう言つてももちろん死ぬ気はなかつた。心の底にははなばなしい凱旋がいせんを夢みていた。であるのに、今忽然起こつたのは死に対する不安である。自分はとても生きて還かえることはおぼつかないという気がはげしく胸を衝ついた。この病、この脚氣、たといこの病は治つたにしても戦場は大なる牢獄である。いかにもがいても焦あせつてもこの大なる牢獄から脱することはできぬ。得利寺で戦死した兵士がその以前かれに向かつて

「どうせ遁のがれられぬ穴だ。思い切りよく死ぬサ」と言つたことを思い出した。

かれは疲労と病氣と恐怖とに襲われて、いかにしてこの恐ろしい災厄を遁るべきかを考えた。脱走？ それもいい、けれど捕えられた暁には、この上もない汚名をこうむったうえに同じく死！ さればとて前進すれば必ず戦争の巷の人とならなければならぬ。戦争の巷に入れば死を覚悟しなければならぬ。かれは今始めて、病院を退院したことの愚をひしと胸に思い当たった。病院から後送されるようにすればよかった……と思った。

もうだめだ、万事休す、遁れるに路がない。消極的の悲觀が恐ろしい力でその胸を襲った。と、歩く勇氣も何なくなつてしまつた。とめどなく涙が流れた。神がこの世にいますなら、どうか救ってください、どうか遁路を教えてください。これからはどんな難儀もする！ どんな善事もする！ どんなことにも背かぬ。

渠はおいおい声を挙げて泣き出した。

胸が間断なしに込み上げてくる。涙は小児でもあるように頬を流れる。自分の体がこの世の中になくなるということが痛切に悲しいのだ。かれの胸にはこれまで幾度も祖国を思うの念が燃えた。海上の甲板で、軍歌を歌つた時には悲壯の念が全身に充ち渡つた。敵の軍艦が突然出てきて、一砲弾のために沈められて、海底の藻屑となつても遺憾がないと思つた。金州の戦場では、機関銃の死の叫びのただ中を地に伏しつつ、勇ましく進んだ。

戦友の血に塗れた姿に胸を撲ったこともないではないが、これも国のためだ、名誉だと思つた。けれど人の血の流れたのは自分の血の流れたのではない。死と相面しては、いかなる勇者も戦慄する。

脚が重い、けだるい、胸がむかつく。大石橋から十里、二日の路、夜露、悪寒、確かに持病の脚気が昂進したのだ。流行腸胃熱は治つたが、急性の脚気が襲つてきたのだ。脚気衝心の恐ろしいことを自覚してかれは戦慄した。どうしても免れることができぬのかと思つた。と、いても立つてもいられなくなつて、体がしびれて脚がすくんだ——おいおい泣きながら歩く。

野は平和である。赤い大きい日は地平線上に落ちんとして、空は半ば金色半ば暗碧あんへきしよ色くになつている。金色こんじきの鳥の翼のような雲ひとひらが一片動いていく。高粱の影は影と蔽おほい重なつて、荒涼たる野には秋風が渡つた。遼陽りょうよう方面の砲声も今まで盛んに聞こえていたが、いつか全くとだえてしまつた。

二人連れの上等兵が追い越した。

すれ違つて、五、六間先に出たが、ひとりが戻つてきた。

「おい、君、どうした？」

かれは気がついた。声を挙げて泣いて歩いていたのが気恥ずかしかった。

「おい、君？」

再び声はかかった。

「脚気なもんですから」

「脚気？」

「はア」

「それは困るだろう。よほど悪いのか」

「苦しいです」

「それア困ったナ、脚気では衝心でもすると大変だ。どこまで行くんだ」

「隊が鞍山^{あんざん}駅の向こうにいるだろうと思うんです」

「だって、今日そこまで行けはせん」

「はア」

「まあ、新台子まで行くさ。そこに兵站部があるから行って医師に見てもらうさ」

「まだ遠いですか？」

「もうすぐそこだ。それ向こうに丘が見えるだろう。丘の手前に鉄道線路があるだろう。」

そこに国旗が立っている、あれが新台子の兵站部だ」

「そこに医師がいるでしょうか」

「軍医が一人いる」

蘇生そせいしたような気がする。

で、二人に跟ついて歩いた。二人は気の毒がって、銃と背囊はいのうとを持ってくれた。

二人は前に立って話しながら行く。遼陽の今日の戦争の話である。

「様子はわからんかナ」

「まだやってるんだろう。煙台で聞いたが、敵は遼陽の一里手前で一ひと支とぎえしているそ

うだ。なんでも首山堡しゅざんぼとか言った」

「後備がたくさん行くナ」

「兵が足りんのだ。敵の防禦陣地ぼうぎよはすばらしいものだそうだ」

「大きな戦争になりそうだな」

「一日砲声ひにちぱうせいがしたからナ」

「勝てるかしらん」

「負けちゃ大変だ」

「第一軍も出たんだらうナ」

「もちろんさ」

「ひとつうまく背後を断つてやりたい」

「今度はきつとうまくやるよ」

と言つて耳を傾けた。砲声がまた盛んに聞こえ出した。

新台子の兵站部は今雑沓を極めていた。後備旅団の一箇聯隊が着いたので、レールの上、家屋の蔭、糧餉のそばなどに軍帽と銃剣とがみちみちていた。レールを挟んで敵の鉄道援護の営舎が五棟ほど立っているが、国旗の翻つた兵站本部は、雑沓を重ねて、兵士が黒山のように集まって、長い剣を下げた士官が幾人となく出たり入ったりしている。兵站部の三箇の大釜には火が盛んに燃えて、煙が薄暮の空に濃く靡いていた。一箇の釜は飯が既に炊けたので、炊事軍曹が大きな声を挙げて、部下を叱咤して、集まる兵士にきりに飯の分配をやっている。けれどこの三箇の釜はどうていこの多数の兵士に夕飯を分配することができぬので、その大部分は白米を飯盒にもらつて、各自に飯を作るべく野に散つた。やがて野のところどころに高粱の火が幾つとなく燃された。

家屋の彼方では、徹夜して戦場に送るべき弾薬弾丸の箱を汽車の貨車に積み込んでいる。兵士、輸卒の群れが一生懸命に奔走しているさまが薄暮のかすかな光に絶え絶えに見える。一人の下士が貨車の荷物の上に高く立って、しきりにその指揮をしていた。

日が暮れても戦争は止まぬ。鞍山站の馬鞍のような山が暗くなって、その向こうから砲声が断続する。

渠はここに来て軍医をもとめた。けれど軍医どころの騒ぎではなかった。一兵卒が死のうが生きようがそんなことを問う場合ではなかった。渠は二人の兵士の尽力のもとに、わずかに一盒の飯を得たばかりであった。しかたがない、少し待て。この聯隊の兵が前進してしまつたら、軍医をさがして、伴れていつてやるから、まず落ち着いておれ。ここからまっすぐに三、四町行くと一棟の洋館がある。その洋館の入り口には、酒保が今朝から店を開いているからすぐわかる。その奥に入って、寝ておれとのことだ。

渠はもう歩く勇氣はなかつた。銃と背囊とを二人から受け取つたが、それを背負うと危く倒れそうになつた。眼がぐらぐらする。胸がむかつく。脚がけだるい。頭脳ははげしく旋回する。

けれどここに倒れるわけにはいかない。死ぬにも隠れ家を求めなければならぬ。そうだ、

隠れ家……。どんなところでもいい。静かな処に入って寝たい、休息したい。

闇の路が長く続く。ところどころに兵士が群れを成している。ふと豊橋の兵營を憶い出した。酒保に行つて隠れてよく酒を飲んだ。酒を飲んで、軍曹をなぐつて、重営倉に処せられたことがあつた。路がいかにも遠い。行つても行つても洋館らしいものが見えぬ。三、四町と言つた。三、四町どころか、もう十町も来た。間違つたのかと思つて振り返る——兵站部は燈火の光、篝火の光、闇の中を歩き違ふ兵士の黒い群れ、弾薬箱を運ぶかけ声が夜の空気を劈いて響く。

ここらはもう静かだ。あたりに人の影も見えない。にわかにかに苦しく胸が迫つてきた。隠れ家が必要なければ、ここで死ぬのだと思つて、がつくり倒れた。けれども不思議にも前のように悲しくもない、思い出もない。空の星の閃きが眼に入った。首を挙げてそれとなくあたりを眺めた。

今まで見えなかつた一棟の洋館がすぐその前にあるのに驚いた。家の中には燈火が見える。丸い赤い提燈が見える。人の声が耳に入る。

銃を力にかろうじて立ち上がった。

なるほど、その家屋の入り口に酒保らしいものがある。暗いからわからぬが、何か釜ら

しいものが戸外の隅かたすみにあつて、薪まきの余もえさし燼しが赤く見えた。薄い煙が提燈かすを掠めて淡く靡ないている。提燈に、しるこ一杯五銭と書いてあるのが、胸が苦しくつて苦しくつてしかたがないにもかかわらずはつきりと眼に映じた。

「しるこはもうお終しまいか」

と言つたのは、その前に立つて一人の兵士であつた。

「もうお終しまいです」

という声が戸内うちから聞こえる。

戸内のぞを覗くと、明らかな光、西洋蠟燭ろうそくが二本裸とで点つていて、鑿びんづめ詰めや小間物などの山のように積まれてある中央の一段高い処ふとに、肥ふとつた、口髭くちひげの濃い、にこにこした三十男おとこがすわつていた。店では一人の兵士がタオルを展ひらげて見ていた。

そばを見ると、暗いながら、低い石階いしだんが眼に入った。ここだとかかは思った。とにかく休息やすみすることができると思うと、言うに言われぬ満足まんぞくをまず心に感じた。静かにぬき足してその石階いしだんを登つた。中は暗い。よくわからぬが廊下らうかになつてゐるらしい。最初の戸かどと覺おぼしきところを押してみたが開かない。二歩三歩進んで次の戸かどを押したがやはり開かない。左の戸かどを押してもだめだ。

なお奥へ進む。

廊下は突き当たってしまった。右にも左にも道がない。困って右を押すと、突然、闇が破れて扉があいた。室内が見えるというほどではないが、そこなく星明りがして、前にガラス窓があるのがわかる。

銃を置き、背囊をおろし、いきなりかれは横に倒れた。そして重苦しい息をついた。まあこれで安息所を得たと思った。

満足とともに新しい不安が頭を擡げてきた。倦怠、疲労、絶望に近い感情が鉛のごとく重苦しく全身を圧した。思い出が皆片々で、電光のように早いかと思うと牛の喘歩のように遅い。間断なしに胸が騒ぐ。

重い、けだるい脚が一種の圧迫を受けて疼痛を感じてきたのは、かれみずからにもよくわかった。腓のところどころがずきずきと痛む。普通の疼痛ではなく、ちようどこむらが反った時のようである。

自然と身体をもがかずにはいられなくなった。綿のように疲れ果てた身でも、この圧迫にはかなわない。

無意識に輾転反側した。

故郷のことを思わぬではない、母や妻のことを悲しまぬではない。この身がこうして死ななければならぬかと嘆かぬではない。けれど悲嘆や、追憶や、空想や、そんなものほどうでもよい。疼痛、疼痛、その絶大な力と戦わねばならぬ。

潮のように押し寄せる。暴風のように荒れわたる。脚を固い板の上に立てて倒して、体を右に左にもがいた。「苦しい……」と思わず知らず叫んだ。

けれど実際はまたそう苦しいとは感じていなかった。苦しいには違いないが、さらに大なる苦痛に耐えなければならぬと思う努力が少なくともその苦痛を軽くした。一種の力は波のように全身に漲った。

死ぬのは悲しいという念よりもこの苦痛に打ち克とうという念の方が強烈であった。一方にはきわめて消極的な涙もろい意気いくじ地ない絶望が漲るとともに、一方には人間の生存に対する権利というような積極的な力が強く横たわった。

疼痛は波のように押し寄せては引き、引いては押し寄せる。押し寄せるたびに唇を噛み、歯をくいしばり、脚を両手でつかんだ。

五官のほかにある別種の官能の力が加わったかと思った。暗かった室へやがそれとはつきり見える。暗色の壁に添うて高いテーブルが置いてある。上に白いのは確かに紙だ。ガラス

窓の半分が破れていて、星がきらきらと大空にきらめいているのが認められた。右の一隅には、何かごたごた置かれてあった。

時間の経^たつていくのなどはもうかれにはわからなくなった。軍医が来てくれればいいと思つたが、それを続けて考える暇はなかつた。新しい苦痛が増した。

床近く蟋蟀^{こおるぎ}が鳴いていた。苦痛に悶^{もた}えながら、「あ、蟋蟀が鳴いている……」とかれは思つた。その哀切な虫の調べがなんだか全身に沁^しみ入るように覺えた。

疼痛、疼痛、かれはさらに輾^{てん}転^{てん}反側した。

「苦しい！ 苦しい！ 苦しい！」

続けざまにけたたましく叫んだ。

「苦しい、誰か……誰かおらんか」

としばらくしてまた叫んだ。

強烈なる生存の力ももうよほど衰えてしまった。意識的に救助を求めると言うよりは、今はほとんど夢中である。自然力に襲^なわれた木の葉のそよぎ、浪^{なみ}の叫び、人間の悲鳴！

「苦しい！ 苦しい！」

その声がしんとした室にすさまじく漂い渡る。この室には一月前まで露国の鉄道援護の士官が起臥きがしていた。日本兵が始めて入った時、壁には黒く煤すすけたキリストの像がかけてあった。昨年こぞの冬は、満州の野に降りしきる風雪をこのガラス窓から眺ながめて、その士官はウオツカを飲んだ。毛皮の防寒服を着て、戸外に兵士が立っていた。日本兵のなすに足らざるを言つて、虹にじのごとき気焰きえんを吐いた。その室に、今、垂死の兵士の叫喚うめきが響き渡る。

「苦しい、苦しい、苦しい！」

寂さびとしている。蟋蟀せせくは同じやさしいさびしい調子で鳴いている。満洲の広漠こうぼくたる野には、遅い月が昇つたと見えて、あたりが明るくなつて、ガラス窓の外は既にその光を受けていた。

叫喚、悲鳴、絶望、渠かれは室の中をのたうちまわつた。軍服のボタンは外はずれ、胸の辺はかきむしられ、軍帽は頷あごひも紐ひもをかけたまま押し潰つぶされ、顔から頬にかけては、嘔吐おうとした汚物が一面に附着した。

突然明らかな光線が室に射したと思うと、扉のところところに、西洋蠟燭ろうそくを持った一人の男の姿が浮き彫りのように頭あわられた。その顔だ。肥つた口髭あひげのある酒保しんぼの顔だ。けれどその顔にはにこにこしたさつきの愛あい嬌きやうはなく、まじめな蒼あお蒼あお暗い色が上つていた。黙つて室

の中に入ってきたが、そこに唸うなつて転ころがつている病兵を蠟燭で照らした。病兵の顔は蒼あおさめて、死人のように見えた。嘔吐した汚物がそこに散らばっていた。

「どうした？ 病気か」

「ああ苦しい、苦しい……」

とはげしく叫んで輾てんでん転てんした。

酒保の男は手をつけかねてしばし立って見ていたが、そのまま、蠟燭の蠟を垂らして、テーブルの上にそれを立てて、そそくさと扉の外へ出ていった。蠟燭の光で室は昼のように明るくなった。隅すみに置いた自分の背囊と銃とがかれの眼に入った。

蠟燭の火がちらちらする。蠟が涙のようにだらだら流れる。

しばらくして先の酒保の男は一人の兵士を伴って入ってきた。この向こうの家屋あたりに寝ていた行軍中の兵士を起こしてきたのだ。兵士は病兵の顔と四方あたりのさまとを見まわしたが、今度は肩けん章しょうを仔細しさいに検した。

二人の対話が明らかに病兵の耳に入る。

「十八聯れんたい隊の兵だナ」

「そうですか」

「いつからここに來てるんだ？」

「少しも知らなかったんです。いつから來たんですか。私は十時ころぐっすり寝込んだんですが、ふと目を覚さますと、唸り声がある、苦しい苦しいという声がある。どうしたんだろう、奥には誰もいぬはずだがと思つて、不審にしてしばらく聞いていたです。すると、その叫び声はいよいよ高くなりますし、誰か來てくれ！　と言う声が聞こえますから、來てみたんです。脚氣ですナ、脚氣衝心ですナ」

「衝心？」

「とても助からんですナ」

「それア、氣の毒だ。兵站部に軍医がいるだろう？」

「いますガナ……こんな遅く、來てくれやしませんよ」

「何時だ」

みずから時計を出してみて、「道理もつともだ」という顔をして、そのままポケットに収めた。

「何時です？」

「二時十五分」

二人は黙つて立っている。

苦痛がまた押し寄せてきた。唸り声、叫び声が堪え難い悲鳴に続く。

「気の毒だナ」

「ほんとうにかわいそうです。どこの者でしょう」

兵士がかれのポケットを探った。軍隊手帖を引き出すのがわかる。かれの眼にはその兵士の黒く逞たくましい顔と軍隊手帖を読むために卓上の蠟燭に近く歩み寄ったさまが映った。三み河国渥美郡 福江村加藤平作……と読む声が続いて聞こえた。故郷のさまが今一度その眼前に浮かぶ。母の顔、妻の顔、櫻けやきで囲んだ大きな家屋、裏から続いた滑なめらかな磯いそ、碧あおい海、なじみの漁夫の顔……。

二人は黙って立っている。その顔は蒼く暗い。おりおりその身に対する同情の言葉が交される。彼は既に死を明らかに自覚していた。けれどそれが別段苦しくも悲しくも感じない。二人の問題にしているのはかれ自身のことではなくて、ほかに物体があるように思われる。ただ、この苦痛、堪え難いこの苦痛から脱のがれたいと思った。

蠟燭がちらちらする。蟋蟀が同じくさびしく鳴いている。

黎明あけがたに兵站部の軍医が来た。けれどその一時間前に、渠は既に死んでいた。一番の汽

車が開路開路のかけ声とともに、鞍山站に向かつて発車したころは、その残月が薄く白けて淋しく空にかかっていた。

しばらくして砲声が盛んに聞こえ出した。九月一日の遼陽攻撃は始まった。

青空文庫情報

底本：「蒲団・一兵卒」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年10月20日改版初版発行

1974（昭和49）年11月30日改版8版発行

※混在している「満州」と「満洲」、「輜」と「輻」は底本通りです。

入力：久保あきら

校正：伊藤時也

2000年9月28日公開

2011年5月19日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

一兵卒

田山花袋

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>